



前夜の吹雪で地面が真っ白になっている札幌を早朝に離れ、日本医師会広報委員会に出席のため駒込の日本医師会館に赴いたのは、もう1ヵ月以上前のことである。3月に入り急に暖かくなった東京の桜の開花は早く、7分咲であった。爛漫と咲き誇る桜の花は辺りを桜色で染め上げ世界を一変させる。しかし、今年の東京の桜は天候のせいなのか、一瞬目を疑ってしまうほど白っぽく、いつもの見慣れた色合いとは異なる印象を受けた。桜の花がまだ見頃の3月31日に開催された日本医師会代議員会での質疑応答において、

コミュニケーションする心

― 質疑応答から学ぶ ―

情報広報部長

山科 賢児

宮本慎一北海道医師会副会長は北海道医師会を代表し、医師不足と偏在を解消するための医師派遣制度については日本医師会が主導すべきと発言した。北海道医報の特集「北海道の医療を立て直す」に、医師の法的配置や規制、開業の規制と制限、地方病院勤務の義務化を望む考え方が地域のセンター病院から出されている。宮本副会長は、自ら医師の職業選択の自由を制限するそのような意見が出ること自体が、地方の医療の窮状や医師不足、医師の偏在が遅々として解決しない現状に対

する会員たちの「苛立ちさ」の裏返しであると訴えた。そして日本医師会が提言している「都道府県地域医療対策センター（仮称）」を医師不足解消への先見的なプロジェクトと評価し、日本医師会の今後のビジョンと姿勢を質した。

この質問に対して日本医師会横倉会長は、臨床研修医だけではなく現役の医師の就労先や配置調整と生涯にわたる医師のキャリア形成を、プロフェッショナルオートノミーに基づいて日本医師会が主導し、先に発表した都道府県医師会と日医が医師養成の中心となる

「医師養成についての日本医師会の提案第3版」の実現を目指すことと答弁した。さらに北海道医師会が参画している緊急臨時的医師派遣事業の紹介と北見医師会を訪れた際のエピソードを交えて、へき

地医療のあり方についての日本医師会の考えに言及した。

宮本副会長の発言は、質問の意図が明確で的が絞られ、質問者の主張がしっかり盛り込まれたコミュニケーションを意識する内容であった。国会中継などを見ていると、質問事項の事実や経過を述べても質問の意図や立場を明確にせず、相手に内容のある答弁を求めるには不親切と感じる質問が多く見られる。質問する際に自らの考えをオープンに発信しなければ、答弁者に回答を求めてもよいコ

ミュニケーションは成り立たない。質問者が、回答を答弁者に丸投げするような姿勢を示してしまうと、答弁者もそつなく切り抜ける回答をすることになり、いわゆる意味不明で如何様にも解釈できる答弁とならざるを得ない。質疑応答の目的は相手を窮地に追い込み言質を引き出すことではなく、お互いが意見や考えを述べ合い共感を深め、より高い次元の方策を共に探ることにあるはずである。

情報広報部を担当して常に念頭に置くのは、会員と医師会との双方向性のコミュニケーションをどのように取り、理解と信頼の距離をいかに近づけるかである。今まで、できるだけ数多くの会員からの原稿執筆を北海道医報に掲載し、会員の声を反映するように心がけてきたが、執行部の内部からそれに応える声が発信されなければコミュニケーションが成立しないと考える。異論もあるが、医師会執行部の内部からの生きた声が発信される機会を今後多くしたい。最近の新聞などのメディアでは署名記事が増加傾向にあるように、組織の中に属する個人のそれぞれの顔が見えることは今やとても大切なことである。それが会員と医師会との距離を縮め、組織強化につながるかと確信している。

例年になく長く寒かった冬がようやく終わる。草木の花が一齐に咲きそろそろ春の到来である。この医報が届く頃には桜前線が北海道に上陸し、まだ肌寒いだらうが花の宴を楽しむ季節となる。今年の北海道の桜は東京の桜のように薄い白色だろうか、それともいつものように薄い紅の桜色であろうか。